

『埼玉教育』一九六〇年十二月（埼玉県立教育研究所）

日本教育の体質改善と教科書の問題

国立教育研究所 矢口 新

(一)

今から十五年も前のことである。終戦直後にアメリカから教科書を寄贈してもらったことがある。低学年の理科の教科書をみたとき、動物の生態を教える教材として次のようなのがあった。牛が空をとんだり、鯨が陸上にいたり、魚が木登りしていたりする絵が描いてある。子どもがそれを見て、間違っていると思うことはまず間違いない。多分笑い出すであろう。しかし考えてみれば、なかなか面白いことである。動物でもそれぞれ習性がちがうのである。どうしてそういうようになってきているのだろうと考えると、これはなかなか不思議なことでもある。

こういう教科書をみたとき、私はなかなかよい教科書だと思った。ユーモラスでもあるが、よく考えてもある。深い味がある。また、日本人の持っている神聖な(?)教科書という生硬な教科書観を抜け出している。日本の教科書の中には、間違ったことなどはなかなかのせられない。ユーモラスなどということは薬にしたくもないのが普通である、正しいこと、大切なこと、おぼえておくべきことがぎっしり入っている。とくに理科の教科書などになったら、真理(?)以外のことはのせていない。真理の戸棚のようなもので窒息しそうである。み

んな知っていないくはならぬことである。おぼえなくてはならないものばかりである。正しいことも、誤っていることも入っていて、頭をひねってクイズをやったり、宝さがしをしたりするといった雰囲気のものには到底なれない。

やはり日本人の教科書観には一種の伝統があるように思われる。封建の世の中からの子曰く式の考え方があるのかも知れない。われわれの子どもの頃にはそんな名残がもつと強かったように思われる。教科書を開く時にはまず一礼をしてからと教える先生もいた。そのこと自体は決してわるくはないかも知れないが、そういう考え方があるために、教科書が、子どもの教材として果さねばならぬ役割を持つことが出来なくなっているとしたら困ったことである。

教科書は子どもの使用するものだから、子どもの側によらなければならぬということ、至上命令のようなものである。従来の教科書論議は、どうも肝心の子どもが忘れられていたようである。

今年小学校の指導要領改訂に伴う教科書の改訂が行われて、検定問題も新聞紙上をにぎわした。展示会前後には、さまざまな面で教科書が問題にされた。しかし総じてそれらは子どもを忘れたものが多かったようである。特に社会科の教科書に関してなどは、イデオロギッシュなものが多くて、子どもはそっこのけにされてしまっていた。そういうと人は反論するかも知れない。子どものためを思うからこそイデオロギーを問題にするのだと。それはその通りであろうが、それなら子どもにどれ位受け入れられるか、一人一人の子どもはそれをどう受けとるかということの問題にしてもらいたかった。子どものことを考えるのはわかるが、それがイデオロギー論ばかりではこまる。例えば、指導要領に、日清日露の戦争をへて云々とあるのは、戦争を肯定しているとかいえないとかと論議されたが、それが教科書論でも依然

として中心であった。教科書は、大人のけんか場になってしまっていた。片言隻句をとらえてそんなことをやっている。子どもの教育が忘れられていたようである。そんな片言隻句で子どもの世界観はきまりはしないのである。子どもを悪くするのはむしろ大人である。満足に話し合いも出来ないで、けんかしている大人の姿が子どもに平和への理想を与えないのである。それでいて、教科書の片言隻句に平和を表現しても何にもならない。教科書を一体何と考えているのだろうか。教科書観を根本的に改める必要がある。

(二)

こころ、二年の間アメリカではテイチングマシンが物凄い勢で利用され、研究されている。これは、教科書の機能の或る一面を発達させたものであるとも言えよう。今後注意しておく必要がある。その一種に次のようなものがある。それは幼稚園で使うものらしい。

上に述べた理科の教科書の内容をそっくりテイチングマシンにしたものである。子どもが向うマシンの前面にガラスの窓があつて、丁度鏡に向うようにしてみると、その中には牛の絵が出ている。その下に四つの小さな別のまどがあつて、それぞれには、牛が空をとんでいたり、水上を歩いていたり、或は草原で草を食べていたりして、絵が出ている、子どもがその中の正しい絵の出ている窓に手をふれると、上の絵はボタンと下へ落ちて、次の絵が出て来る。誤った絵の出ている窓に手をふれたのでは、絵は動かない。ざっとこんな具合である。

教科書は一人一人が所有しているが、それを使用するとき、一人の教師が、二十人なり三十人なりの子ども（これはアメリカのことである。もつとも最近では日本でも農村にこういう学校がかなり多くなっ

て来た）を一緒にして指導する。そうすると、上にあげた理科の教科書のように、子どもに面白いものでも、一人一人の子どもが本当に緊張して、教科書にたち向うかどうか、中には、ぼんやりしている子どもも出て来るであろう。

そこで一人一人の子どもに最大限の注意力、精神集中を發揮させるために考え出されたのが上に述べたテイチングマシンである。テイチングマシンは、あまり適切な名前でない。むしろセルフテイチングマシンと言うべきだという人もいる。最近のアメリカは、専ら子ども一人一人の充実した学習の問題に関心があるように思われる。それがテイチングマシンというものを発達させて来たのである。

教科書を問題にする場合もこのような態度は必要であろう。いな、そういう考え方が教科書を更に分化させて、テイチングマシンを発達させたといえるかも知れない。日本の教科書観には、残念ながらそういうものがないのではないか。

七月にユネスコの主催で国際視聴覚教育の会議が開かれたとき、アメリカからきたドクターストーンという人が、このテイチングマシンのことを非常な期待をもって紹介していた。恐らくここ数年の間にアメリカの教育は、根本的な体質改善をとげるであろうといっていた。そういうことを聞くと、私は日本の教科書観が極めて古くさいものと思われてならない。

教科書が学習指導にどう使用されているかをみると、そういう弱点が最もよく出ているようである。教科書を読んでおぼえるという読み方以外に、教科書の使い方がないのではないか、或はそれを読んで、わからない言葉をわかりやすい言葉で解釈するということ以外に教師の指導はないのではないか。教科書は子どもを育てる教材が提出されているという考え方でなく、大切におぼえておくものであるという

考え方である。子どもを育てる教材という考え方になれば、それはおぼえるものばかりではない。上に述べた理科の教材のように考える材料もまた教科書に提出されるわけである。練習教材もあってよいであろう。もとより教科書という形をとる以上、そこには一定の限界があることは認めなければならない。また教科の性格によって、教材の性格もまたいろいろであるが、しかしそれらの教材の種類がもつと様々に分化して、よいはずである。とくに子供の学習活動の対象としてという見地から、様々な種類の材料があつてよいはずである。考える材料を提出する場合、考え方を教える場合などというように教科書の内容はもつと子どもの学習の側から分析されなければならぬであろう。そういう分析的研究ももつと多く出て来なくてはならぬ。

(三)

これも終戦直後にアメリカから送られて来た教科書の中にあつた歴史の教科書の話であるが、それは、日本の社会科の歴史の教科書の如きものと全く異つた種類のものではあつた。いわば一種の歴史物語である。一つ一つの小さなテーマ、例えば、開拓時代のニューイングランドの生活の様子といったテーマで、一冊になつていて、六十頁ぐらゐのもので、その時代の生活が描写されている。あたかも小説の如く、或る少年の一日といったものである。勿論精細な考証を經ているものである。

これは日本式の教科書、説明教材によつて占められている歴史の教材とはまるでちがうものである。日本の教科書であれば読んでおぼえておきたくなるものであるが、そういうアメリカのようなものだと、今の生活と比較したり、その理由を考えたりしたくなる。日本式では理由が説明されているが、アメリカ式は子供に考えさせようとしてい

る。

それは参考書ではないかなどという人もいるかも知れない。参考書とか、子供の読み物といわれるものの中には、そういうものがあるようである。そういうものが参考書でなく教科書になりたいものである。本当のところ、参考書といい、教科書というも、教育的には、本質上の差異はない。二つを差別するのは、ただ検定があるかないかであつて、ただ法規上のことでしかない。ただこの法規があることが、教育をよくするようになっていくかどうか、現在のところは、斬新なすぐれた教科書が生れるのを邪魔しているのが、教科書検定ではないだろうか。早く検定がなくなるようにしたいものである。しかしそれには、検定がなくなつても、中正な教科書、真剣につくられたよい教科書が出来るように、教師が正しい目で批判出来るようになっていなくてはならぬが、その点はどうなのか。なかなかむずかしい問題がありそうに思われる。

それはさておき、今のところ、教科書にもりこむ教材の性格をもつと精細に分析する研究だけは今からすぐはじめなければならない。そのことに関して、もう一つ別な例をあげよう。

それはやはりテイピングマシンのことである。特に外国語の教育に使用されるものをランゲッジラボラトリーと呼んでいるが、これも広い意味のテイピングマシンに入れてよい。これは、話すこと、聞くことに関する教育は耳と目とを訓練することを主にすべきだということとで、レコード、テープレコーダー・マイクロフォンなどを使用して、一人一人が聞き、話す施設をつくつて教育する方式である。そういうやり方を、日本の教科書一冊を使用して読む、書く、話す、聞くを合せてやっている未分化の方式と比較してみるとどうであろうか。日本式の教育では、十年英語を学んでも、ほんとうに英語が使えるよう

にはなりはしない。話すことや聞くことが出来ないばかりでなく、読むことや、書くことも満足に出来ない。読めても、ほんとうに読めるようにはならない。文をたどることは出来るけれども、読む中には入らない。言葉とは本来、耳や目で習慣的に身につけるものなのであるから、それを欠いていては、読むことも本格的には身につかないのである。

このように考えると、教科書の中味は相当に変化しなくてはならないであろう。現在中学校や高等学校で使用されている教科書は大改訂が加えられなくてはならぬのである。それはつまり、生徒一人一人がほんとうに語学の力をつけるといふことから当然考えられて来る結果なのであるが、そういうことが忘れられて、ただ教科書を教えているというのとは一体どういうことなのであるか。そこにはなにか、致命的な誤謬を犯しているのではないか。私は、教科書のことを考える場合に、子供一人一人を育ててやるという考え方が失われたからではないかと思う。昔からの惰性に従って考えているからだと思う。ここらで一度転換する必要があるはしないか。

(四)

日本の教育は現在体質改善の課題に迫られている。様々な根本的改善の問題があるが、それは決して教育基本法の作文を改めるくらいのことでは出来ない。教育の事実を改めることである。その中の一つとして最も重要なものに属するのが、教科書や教材教具などの学習の条件をつくっているものの革新、整備の問題がある。上に述べた点からも察せられるように、先進諸国は、ここ数年の間にこの方面で著しい発展をとげている。三年が十年にも当るようなスピードで進歩している。子どもを育てる教材はもはや教科書でなく、様々な教材

である。場合によっては、設備が中心である。そういうようになってきている所で、テキストはいかなる意味をもつものなのか、いかなる位置が与えられなければならないかをはつきりさせなければならぬ。これまでのように教科書が中心教材などという、古くさい考え方はこれからの教育はなり立たないのである。

しかしそういうことは、具体的に教科によってちがうのであって、教科書一般に論ずることは出来ない。国語教育における教科書と理科教育における教科書とはまるでちがう。これもアメリカの話であるが、理科の教育で例えば電気に関する教材一切を一つのユニットとして、それを一つのセットにして考える考え方が生まれている。場合によってはそれが一つのルームに備えられていて、そこで教育される。そのようなセットを見ると、一番重要なものは、実際の設備、それから視覚的に説明するフィルムやスライドで生徒はそのセットのある教室に入って、いきなり具体的なものに即して勉強をはじめ。わからない所はフィルムなどで、説明をうける。テキストというのは、学習の順序を示してあったり作業の仕方の指示があったりである。こうしてみると、テキストはもはやワークブックに近いものになって来ている。これは理科の教育の根本的な改善の問題になるであろう。アメリカでは最近サイエンスリテラシーという言葉が通用しているが、日本人をそういう見地で見るとほとんどがサイエンスの文盲であろう。

サイエンスリテラシーを実現するためには、その教育の仕方、上に述べたような方式に改める必要があるであろう。依然として教科書が中心教材で、実験や実習の用具は補助的なものと考えていたのでは、お話にならないことになる。教科書の問題はこのようにして、単にこれまでの伝統的な教科書観に基いた問題でなく、根本的な学習の改善の問題と結びついたものになって来る。これは、今のところ日本では

ちよつと聞いただけでは夢物語に近いことも知れない。そこに日本の教育問題があるのではないか。世界の教育の姿からみると、こういう変革は、焦眉の急であつて、今からすぐ取りかかる問題である。それが自覚されないところにわれわれ自身の問題があるのではないか。

以上私は教科書の問題を、現在の日本の学習改善の問題と結びつけて考察してみた。教科書を教科書単独の問題として論じていたのでは今の問題は明らかにならないのである。教科書の改善の問題は、日本教育の体質改善の問題の中に正しく位置づけられて考えられなければならない。そういう問題として教科書問題があるというのが私の認識なのである。

しかしこのような教科書改善の問題、ひいては、日本教育の体質改善の問題はどのようにして果されるであろうか。現在の日本の教育問題が総じてここに述べたような方向とは全く逆な方向にあることを私は心配している。勤評問題、道徳教育問題、教科書検定問題、カリキュラム問題など、いずれも、具体的な体質改善の問題とはあまりにもはなれた抽象的な問題である。最近はまだ教育基本法の改善の問題が出て来た。このような観念的な方向は一体どこから出て来るのであるか。教育問題が具体的な方向へ入らないで、抽象論、観念論へ行くのはどうしてであろうか。そういう雰囲気の中では、教科書問題もまた、抽象観念論へ進むであろう。教科書の思想がどうか、内容がどうかとかいうことが、子どもと関連なしに教育関係者の主観をもとにして論議されていたのではそこにはもう教育を発展させる生命が失われているのである。教科書を問題にする仕方が改められるべきであろう。